

荒川の大囲堤～荒ぶる川から集落・田畑を守る先人の知恵～

氾濫を繰り返す荒川中流部には、川を堤防で囲うのではなく、集落や田畑を囲う堤防である「大囲堤」が築かれてきました。



吉見町の大囲堤



大囲堤の上を走るサイクリングロード

大囲堤の成立

大囲堤は、水害に備えて集落を輪のように囲む堤防のことで、昔から、熊谷市（旧大里町）や吉見町、川島町などでつくられていました。

荒川の中流域は低地が続いており、もともと洪水の多い地帯でした。これに加えて、江戸時代前期に物資の運搬路開拓や灌漑目的で荒川の瀬替えなどが行われるようになり、洪水が増しました。しかし荒川では、川を堤防で囲って治めることは難しく、このため洪水に備えていくつかの村が共同し、集落や村の側を囲む「囲堤」がつくられるようになったのです。

▶ 四方を川に囲まれた川島領の大囲堤

北を市野川、東を吉野川※、南を入間川、西を都幾川（ときがわ）と越辺川（おっべがわ）が囲む島状の低地だった現在の川島町では、慶長年間（1596～1615年）に信州出身の伊奈忠次がすでにあった小規模の囲堤を増築し、川島領大囲堤を構築しています。さらに慶安年間（1648～1651年）には当時の領主松平伊豆守信綱が、囲堤のかさ上げと補強工事を行っています。それでも荒川沿いの堤防はしばしば決壊したようです。川島町の大囲堤が補強されて現在の堤防の一部にもなっており、その労力として多くの「あおさん」と言われる囚人達が集められていました。

※1629（寛永6）年に始まる荒川の付替え前は、現在の荒川の流路を流れていたのは吉野川でした。



川島町をぐるりと囲む「大囲堤」

▶ 荒川大囲堤絵図から分かること

右の絵図は、江戸時代に描かれたものです。荒川が左から右に向かって流れており、大里村（現、熊谷市）や比企郡吉見領が大囲堤で囲われていることがわかります。また、大囲堤は台地につきあたり、自然の地形を利用していたことも分かります。

このように荒川に沿って複数の大囲堤がつくられてきました。

また、荒川の対岸にも、囲堤ではありませんが、堤防が築かれていたのがわかります。

このため、堤防修築等の改修が別の場所の水害発生原因となるなどして、上流対下流、右岸対左岸というような争いが頻発しました。



大里郡横見郡村々荒川堰場絵図に荒川上流河川事務所で加筆

くらゝ 大囲堤内に暮らす人々の知恵

水害から身を守るための知恵として、水塚や上げ舟があげられます。

水塚とは、敷地内の一部に土を一段高く盛り上げて築いた石垣の上に建てられた、洪水時に避難するための建物です。

上げ舟は出水時に使用する重要な舟で、常時は納屋などに吊り下げられていました。



上げ舟（川島町）



水塚（川島町）

アクセス

さくら堤公園

埼玉県比企郡吉見町にあるさくら堤公園は、吉見領大囲堤の一部が公園になったものです。埼玉県の桜の名所のひとつに数えられ1.8kmにわたり桜並木が続きます。

交通：東武東上線「川越駅」より、東武バス鴻巣免許センター行き「荒子」下車、徒歩15分

住所：埼玉県比企郡吉見町大字飯島新田



さくら堤公園

